



山登如

2020年度

付中通信第11号

学校文化

2020.10.30 (金)

高水高等学校附属中学校長 宮本 剛

楽学祭は今年で12回を数えますが、私自身の教師人生において、かなり思い入れのある学校行事です。

それというのも、自分自身が高水で中高時代を過ごした時も含め、本校の文化祭のあり方にはずっと不満を抱いてきたからです。

一方、運動会は、はっきり言って私たちが生徒の一人として本校に在籍していた当時の方が、もっと生徒主体でさまざまな要素、つまり体育祭的な華やいた部分が濃厚だったので、もし改革するとしたら、当時の面影を追っていけばよいかと思います。ただ、どの学校も行事を縮小したり取りやめたりするような傾向の中にあって、昔の面影を追えと言ったところで、消え去った運動会文化はもう取り戻せそうにありません。

運動会に深入りすると、元に戻れなくなりそうで怖いのですが、ついでにここで存念を述べておきます。私が本校卒業後12年経って、一教諭として本校に着任した時（昭和の終わりころ）には、すでに運動会は大きく変質していました。たったの12年でしたが、されど12年で、まずがっかりしたのは、生徒時分、どこの学校にもあった応援合戦が消滅していました。



昭和30年代の運動会（手作りの白虎の前で白組記念撮影）

附属中学が赤白の2色、高校は青緑黄紫の4色の隊で編成され、私のおぼろな記憶の中では、それぞれの隊に先輩からの口伝による応援の型が存在していました。その口伝にしたがって各隊の応援団が編成され、先輩が後輩を指導する、そういう期間が運動会前の1週間はあったと思います。その1週間で、各隊はベニア板をつなげた大きな画台をつくり、絵や文字を書き込んで、そのテントの前面に誇らしげに立て上げていました。

入場門の飾りや保護者を迎える校門にも、こちらは生徒会の諸君がすきすきに工夫を凝らしたアーチをこしらえていました。この運動会シーズンは、いつもは目立たない生徒が立看のアーティストに変貌したり、いたずら好きの生徒が科学室を占拠してバルーンを飛ばす実

験をしたり、とにかくいろいろな事件含みの、熱気にあられ熱にうなされたような運動会だったのです。

しかし、それらはひとたび失われてしまえば、つまり先輩が後輩に伝える熱のありようを再現できる機会がなくなると、もうおしまいです。二度と生まれない、繰り返せない高水の運動会文化なのでした。

その理由を推測すると、ひとつには、第2次ベビーブームの生徒たちが入学してきて、学校がパンパンに膨れ上がり、競技本位の無機質なプログラムを敷かないと、運動会のプログラムそのものが破綻してしまったこと、グラウンドはさばくにさばききれない生徒で埋め尽くされてしまったことです。そしてもうひとつには、学校文化の再現性に対する危機意識が完全に欠落していたことです。

まあ、どんな運動会が理想なのかはだれが決めるわけでもありません。ただ、広大付属校がいまだに大きな熱量を伴った生徒主体の輝かしい運動会を実施できているのは、奇跡に近いし、だからそれだけに私はうらやましい気持ちを持っていることは間違いありません。

おのずと伝統とは何だろうかと問いたくなります。